

# 『審美と体育』にみる〈美〉の思想の実際

—荒木直範 (1894—1927) の「体育ダンス」論の思想的背景を探る—

廣 兼 志 保\*

## I. 問題提起

### 1. 荒木直範の業績

筆者はこれまでに、大正後期～昭和前期に活動したダンス教育研究者・荒木直範 (1894—1927) の業績について研究を続けてきた。その過程で明らかにされた彼の主な経歴は、表1「荒木直範と『審美と体育』の年譜」に示す通りである (川上<sup>19)</sup> pp. 9—10)。

荒木が特に推進しようとしていたのは「体育ダンス<sup>註1)</sup>」の研究と指導であった。彼は欧米の教材を翻訳し紹介したり、自作の教材を発表したりして、「体育ダンス」の普及につとめた。欧米へ留学し当時の最新式の体育法を学んだ後には、体育による文化の振興をめざして大日本体育遊技研究会を組織し、機関誌『審美と体育』を発行した。彼は33歳で没するまでの7年間の研究生活の間に全国各地で講習活動をおこなったほか、執筆活動もおこない、ダンス教育に関しては5冊の著書を発表している (荒木<sup>1) 2) 3) 4) 9)</sup> )。

彼が取り上げた「体育ダンス」の内容は、以下のように分類される (片岡<sup>16)</sup> pp. 62—63)。

- a. 行進遊戯 (行進による隊型変化中心)
- b. キャリセニックダンスとアスレティックダンス (身体修練・強化)
- c. フォークダンスとキャラクターダンス (皆で踊って楽しむダンス)
- d. エセティックダンスとナチュラルダンス (美的・表現的ダンス)

彼は、Y. M. C. A. や留学先で学んだこれらの「体育ダンス」を実践することにより、行進遊戯中心で運動の種類も量も少なかったそれまでのわが国のダンス教育に、多彩な教材を導入した。そしてそれらの教材を通して、手足を大きく使ったポーズやテンポのよいリズムカルなステップなど、全身を調和的に用いるようなダンスの動きが紹介されることとなった。

また、彼は、欧米の体育理論やダンス教育の理論をもとに、発達段階に応じた体育ダンス教材配当の標準を定めるなど、教育方法の改善・開発にも力を尽くした (川上<sup>19)</sup> pp. 49—50)。

### 2. 荒木直範の「体育ダンス」論

荒木直範の「体育ダンス」論の特徴には、以下の特徴があることが明らかにされている (川上<sup>19)</sup> pp. 78—80)。

- ①体育への〈美〉の導入とその内容面での多彩な発展
- ② (体育ダンスから社交ダンスへつながる) 学校体育と社会体育との融和の構想
- ③科学的理論に裏付けられたダンス教育論の提示
- ④身体修練のダンス教育から表現的ダンス教育への模索

彼の「体育ダンス」論の第一の特徴は、「体育への〈美〉の導入」にある。この〈美〉という言葉は、荒木の遺した論説の中に繰り返し現われるものである。すなわち、〈美〉とは、荒木の「体育ダンス」論や業績を特徴づけるキーワードであると考えられる。よって、彼の「体育ダンス」論を支える思想的背景として、〈美〉の思想は重要な役割を果たしていると考えられる。

彼は実践面では「体育ダンス」の指導によって「体育への〈美〉の導入」を実現させようとしていた。そしてその指導方法や教材など目に見える現象としての〈美〉については既に明らかにされてきた (川上・片岡<sup>18)</sup>)。しかしその背景に存在する思想—すなわち、彼がダンス教育を通して実現しようとした〈美〉の意味—についてはまだ明らかにされていない。この問題を解明するためには、彼が〈美〉をどのようなものにとらえていたか、また、〈美と人間〉〈美と体育〉〈美とダンス〉の関わりをどうとらえていたかについて考察をすすめる必要がある。

筆者はこれまで、著作の講読を中心として荒木直範研究をすすめてきたが、荒木が主宰する研究会の機関誌であり彼自身が創刊と編集に携わった雑誌『審美と体育』についてはまだその詳細が明らかにされていない。「審美と体育」を入手しその内容を明らかにするならば、荒木が研究同人たちと共にどのように〈美〉について考え、その思想を「体育ダンス」を通して展開させようとしていたのかという問題を明らかにする手がかりが得られるのではないと思われる。

## II. 本研究の目的と方法

本研究では、上述の問題提起をうけて、「体育への〈美〉の導入」という視点から、荒木が創刊し編集した雑誌『審美と体育』にみる〈美〉の思想の実際を明らかにし、荒木の「体育ダンス」論の思想的背景を探ることとする。

表1 荒木直範と『審美と体育』の年譜

年代と荒木の年齢	荒木直範年譜	『審美と体育』年譜*
明治27年 (1894)	10月 長崎県南高来郡島原町(現・島原市)にて出生	
大正4年 21歳 (1915)	基督教青年会(YMCA)に入会 本部より体育専門の研究を命ぜられ 神戸YMCAのH.G.フランクに師事。 フランクと共に上京。アメリカ式体育法を学ぶ	
大正5年 22歳 (1916)	青山学院文科入学。哲学を専攻 東京基督教教会館体育部でフランクの助手を務める	
大正7年 24歳 (1918)	シベリア出兵慰問幹事として出動。その際フェリピンでロシアのダンスを学ぶ。	
大正9年 26歳 (1920)	ロシアより帰国。東京YMCA体育主事としてW.S.ライオンと共に働く。 7月 同会夏期講習にてチキステックダンス講習のおこなう 可児徳とチキステックダンス研究会を組織	
大正11年 28歳 (1922)	YMCA辞職 東京女子体操音楽学校に就職	
大正12年 29歳 (1923)	2月 著書『体育ダンスと社交ダンス』発行 10月 欧米留学に出発 12月 著書『体育ダンス精義』発行	
大正14年 31歳 (1925)	7月 留学より帰国	
大正15年 32歳 (1926)	3月 著書『体育ダンス教材集第一編』発行 4月 大日本体育遊技研究会を組織 機関誌『審美と体育』創刊(月刊誌)	4月 『審美と体育』第1巻第1号発行
昭和2年 33歳 (1927)	4月 肺結核にてたおれる 5月 女子体育大会(於 明治神宮陸上競技場)参加。マラソンを指揮する 6月 著書『体育ダンス教材集第二編』発行 7月 著書『アル運動学講座 体育ダンス概論』発行 10月 死去	1月 同第2巻第1号発行(編集人:荒木直範, 発行・印刷人:高田三治郎) 4月 同第3巻第4号発行(編集人:荒木直範, 発行・印刷人:高田三治郎) 6月 同第3巻第6号発行(編集人:荒木直範, 発行・印刷人:高田三治郎)
昭和3年 (1928)		3月 同第4巻第3号発行(編集人:池田久光, 発行・印刷人:高田三治郎) 7月 同第4巻第7号発行(編集人:池田久光, 発行・印刷人:高田三治郎) 12月 同第4巻第12号発行(編集人:定村青葙, 発行・印刷人:池田久光)

\*ただし、『審美と体育』の発行状況については、本論文執筆に際して確認できた範囲内での記載である。

荒木直範は33歳の若さで早世し、その名は激変する歴史の流れの中のみこまれていった。しかし彼の遺した思想には、今日、私たちが回帰すべき原点が示唆されているように思われる。それを一つひとつ掘り起こしていきたい。本研究は、そのための第一歩である。

『審美と体育』は、大正15(1926)年に創刊された月刊誌である。ただし、途中で発刊改革をおこなっているために、休刊した号もある(公告<sup>56)</sup>巻頭)。また、同時代に発刊された他の体育・遊戯関係の雑誌と同様に本誌もその多くが散逸しており、現存が確認できたのは、日本体育大学図書館に所蔵されている以下の6冊のみであった。

第2巻第1号 昭和2年(1927年)1月発行

第3巻第4号 昭和2年(1927年)4月発行<sup>註4</sup>

第3巻第6号 昭和2年(1927年)6月発行

第4巻第3号 昭和3年(1928年)3月発行

第4巻第7号 昭和3年(1928年)7月発行

第4巻第12号 昭和3年(1928年)12月発行

本研究では、これらの資料と荒木直範の著作を主な手がかりとして考察をすすめる。

考察の視点は以下のとおりである。

#### 1. 『審美と体育』の特徴の解明

- ・『審美と体育』には誰がどのような記事を書いているのか
- ・『審美と体育』はどのような特徴をもった雑誌なのか

#### 2. 『審美と体育』にみる〈美〉の思想の実際の解明

- ・『審美と体育』では〈美〉〈人間〉〈体育〉〈ダンス〉がどのように関わり合っていると考えられていたのか
- ・『審美と体育』にみる〈美〉の思想の特徴とはどのようなものか
- ・〈美〉の思想を展開するにあたって誰がその中心的な役割を果たしていたのか

#### 3. 荒木直範の〈美〉の思想の見直しと「体育ダンス」論の思想的背景における〈美〉の位置づけ

- ・荒木直範は〈美〉〈人間〉〈体育〉〈ダンス〉がどのように関わり合っていると考えていたのか
- ・荒木直範の「体育ダンス」論の思想的背景において〈美〉の概念はどのように位置づけられるのか

#### 4. 荒木直範の〈美〉の思想と『審美と体育』との関わりの考察

- ・荒木直範の〈美〉の思想は『審美と体育』に反映されているといえるか

### III. 結果および考察

#### 1. 『審美と体育』の特徴

荒木直範が主催した大日本体育遊技研究会は、「科学、哲学、芸術ヲ根柢トスル調和統一セル体育主義ノ建立」(<sup>57)</sup>巻頭)を第一の活動目的とした全国組織の研究会である。

大日本体育遊技研究会は発行所・審美と体育社を設立し、雑誌『審美と体育』を毎月発行していた。

そこで、まず『審美と体育』の全体的な特徴を知るため、入手できた6冊に掲載されている記事全212件について目次一覧を作成した。(文末の資料「機関誌『審美と体育』目次一覧」参照)

さらに全212件の記事内容を主題別に分類したところ、表4のような結果が得られた。分類領域の内容は以下の通りである。

- 美と人間
- 美と体育
- 美とダンス
- ダンスの指導・紹介
- 体操・スポーツ・レクリエーションの指導・紹介
- 論説・随筆
- 研究会活動報告
- 人生の探求
- 文芸・音楽・芸術
- 生活
- 荒木への追悼文
- その他

各記事の内容をみると、体育・遊戯<sup>註2</sup>に関する論説や実践報告などの記事を中心に芸術・哲学・生活等に関する記事も多く掲載されていることがわかる。ダンス・体操・スポーツ・レクリエーションの指導や紹介を中心に、〈美〉〈生活〉〈人生〉〈芸術〉などについての教養も広く紹介しようとしているといえる。

また「投稿規定」には、読者に対し「体育ダンス」や遊戯の創作教材や指導法に関する原稿のほか、「体育、科学、哲学、芸術に関する論説等」「体育、科学、哲学、芸術、その他学術上の研究記録」「詩歌、小説、戯曲、及其等の鑑賞批判等」「通俗の大衆読物、座談会記事、紙上講演等」「医事、衛生、食物、料理、衣類、住居其他家庭に関する読物等」を募集している(<sup>59</sup>p. 75)。さらに編集後記には「本誌は、科学、哲学、芸術を根柢として調和統一せる体育主義の建立を目標として生まれたもので、我国では最初にして唯一のものである」(<sup>58</sup>p. 75)とあり、雑誌の特徴が示されている。

このような誌面づくりは、同時代に発行されていた体育・遊戯関係の代表的な雑誌<sup>註3</sup>「体育と

競技」と比べても際立った特徴を示している。このように多領域にわたる広い視野から人間の営みとしての体育を考えようとする誌面づくりをしている点に「審美と体育」の特徴がある。

以上のことから、「審美と体育」は大日本体育遊技研究会の活動目的を体現した雑誌であり、科学・哲学・芸術と体育とのつながり合いを重視するという編集方針に特徴があるということがわかった。

同誌が、哲学や芸術と体育とのつながり合いを重視した誌面づくりをめざしているならば、同誌の名称である「審美と体育」という語もまた、その思想を象徴したものとみることができる。これは、荒木の思想「体育への〈美〉の導入」と共通している。そうであれば、「審美と体育」誌面にも何らかのかたちで彼の〈美〉の思想が反映されていると予測されよう。

そこで、次に、表4に分類された「審美と体育」の記事全212件のうち〈美〉に関する内容が書かれた a. 美と人間、b. 美と体育、c. 美とダンスの各領域の記事を抽出し、「審美と体育」にみる〈美〉の思想の実際を探っていくこととする。

## 2. 「審美と体育」にみる〈美〉の思想の実際

### (1) 美と人間の関わり

#### ①内面の美と外面の美

美に対する人間の願望を具現化する行為としては、芸術がある。「審美と体育」には、芸術に関して次のような主張がみられる。「新興芸術は、凡て、新時代精神そのもの、発現である。(中略)本質を把握し、生命そのものに合体しようとする。形のみが現実ではない。」(北上<sup>22)</sup> p.15)「真の芸術作品は、恰も母親が小児を愛の結晶として考へるやうに、芸術家が生活して来た生活の果実として、時折り彼の心霊の中に実るものである。」(Tolstoj<sup>44)</sup> pp. 2-3)

「我れ我れが古芸術品に対し、自然に頭がさがり何ともいへぬ或る偉大なものに接する如く感ずるのは、何もその技工が優勝であるからといふ次第ではない。(中略)その作者の個性が偉大なのである。その自己が高潔なのである。その威力が現る、のである。」(梅花白屋<sup>10)</sup> p.90)

これらの論説に共通しているのは、外面の技巧的な美のみでなく内面の精神の美が表出されることが真の芸術であると主張している点である。

一方、人間そのものの美についても、以下のよう論が展開されている。

例えば、大河内泰は論説を発表し、人間の精神的願望の一つに美に対する願望があると述べている。その願望の主な種類は自然美・人工美・人体美であると解説、人間の美を思想美と肉体美に大別した(大河内<sup>33)</sup> p.41)。彼は肉体美と精神美の

双方が関わりあってこそ、完全な人間美が構成されると考えた(大河内<sup>33)</sup> p.41)。また、彼は自然に発育した人間の美は人工的につくりあげた美に勝ると主張し、人体に遺伝と環境と教育とが最も適応するように働きかければ、「健康美が自然に付与され、肉体美が生まれ、動態美が供せられ、思想美が発現される」(大河内<sup>35)</sup> pp.10-11)としている。そして「かくなつた時始めて女性なれば女性美が発揮されることになり、其の結果は社会人の一人として立つことは勿論の事、円満なる家庭の人として幸福に天職を全うし尽くす事が出来る」(大河内<sup>35)</sup> pp.10-11)と述べている。

また、櫻井匡は、「人間が此世に於て立派に人間らしき生涯を送るに必要な資源が二つある。日々、健康、日々、品性である。」(櫻井<sup>38)</sup> p.8)「一方に於て体格の美、健康の美を得ると同時に品性の美、人格の美を得なければならない。この二者を實力として凡ゆる人生の活動に向はねばならない。」(櫻井<sup>38)</sup> p.11)と述べている。二者の論に共通しているのは、人間は外面的な美と内面的な美を双方備えていなければならないと説いている点とそのことによって充実した人生を送ることができる点と主張している点である。

また、精神の美は肉体の美を通して目に見えるかたちとなって表れるという主張も、人間の美に関する論説に共通してみられる特徴である。例えば、小菅一男は「姿勢は其の人の品位、人格と云ふものを黙々の裏に語つてゐる。」(小菅<sup>27)</sup> p.18)「各人の感情はその人の姿勢を作る」(小菅<sup>27)</sup> p.21)と述べ、大河内は「思想美は外形には野卑ならざる動作振舞として表はれ、上品なる服装として表はれ、奥ゆかしい言語として表はれ、親しみ易い気持ちよい顔面表情として表はれる。殊に女性の眼には最も表はれるのである。」(大河内<sup>35)</sup> p.17)と述べている。

これらの主張はいずれも精神と肉体の美が得られてこそ人生は充実するのだと説いている点で共通している。

「審美と体育」にみる美と人間との間に存在している関係とは、人間は美を欲し探求することによって芸術作品だけでなく自らの在り方にも美を実現させることができるという関係、そして人生の修養により内面の美が生まれると同時に外面の美が生まれるという関係であるといえる。

「審美と体育」には、小説も連載されている。小島櫻峰の小説「愛と人生」の主人公・華子と省三は、自分の信じる真理と良心にしたがって人生を切り拓こうとするが、彼らの生き方は親世代の理解を得られない。真摯であるがゆえに傷つく青年の心理が描写されている(小島<sup>24)</sup>)。

この小説に対して、読者投稿欄に、小説として単調で人物に個性がなく書き方がエッセイのよう

だとの批評が掲載されている（K生<sup>28</sup> p.92）。それに対して作者は、個性の描写や文体の構成などは眼中にないと述べ、「その創作の中に暗示があり、理想があり、吾々の実生活をして一步向上進展せしめんとする力が幾分でもあればそれを文芸、否芸術として認めたいのです」と答えている（K生<sup>28</sup> p.92）。この返答には、作品の外面的な技巧だけでなく内面にある主題を重視する態度が示されている。この内面性重視の態度は、前述の芸術論や人間美に関する論説とも共通する。

したがって、「審美と体育」においては、論説や小説といった形式の違いを超えて共通した考え方が示されていることがわかる。それは、芸術作品や人間そのものはその人の内面の表出であり存在そのものが内面と外面をまるごと表しているとみる考え方であり、だからこそその根源にある自己の修養が必要なのだとする考え方である。

②理想の人間美の条件

『審美と体育』第4巻第12号に掲載された中里史子の戯曲「秋の夜」は、若い女性新入社員をほめた夫の言葉が妻にささやかな嫉妬を起こさせる様子と夫婦の仲直りの様子を淡々と描いた作品である。この戯曲の中から新入社員の描写にあたる部分を抜き出すと、新入社員に象徴された新時代の理想の女性像が具体的にイメージできる（中里<sup>32</sup> pp.44-49）。

- ・ハッキリした声をしている
- ・職業はタイピスト

- ・洋装がよく似合う
- ・年のわりにしっかりしている
- ・すっきりとした断髪である
- ・語学が達者である
- ・劇・音楽・絵・文学などの趣味がある
- ・テキパキと仕事をする
- ・頭がよい
- ・本当のモダンガールである
- ・フレッシュで明るくて健康で快活である
- ・近代的教養が豊かである
- ・肉親思いである
- ・快活でさっぱりしていてどこかやさしい所がある

『審美と体育』には、その他にも、論説や随筆の中に理想の人間美の条件に関する記述が散見される。そこで、それらの記述を拾いあげ、表2「『審美と体育』にみる人間美の条件」としてまとめてみた。

ここにあげられている条件を総合すると、心身ともに健康で活動的な人間こそ美しいとする考え方がみえてくる。これは、前述の〈美〉と人間の関わりについての論説や戯曲に書かれた新時代の理想の女性像についての描写と共通している。

これらの美を視覚的に表現したものとして、いくつかの口絵が掲載されている（荒木<sup>51</sup> 巻頭、<sup>45</sup> 表紙、<sup>46</sup> 巻頭、<sup>47</sup> 巻頭、<sup>48</sup> 巻頭、<sup>49</sup> 巻頭、<sup>50</sup> 巻頭、<sup>51</sup> 巻頭）。中でも、『審美と体育』の表紙には、ギリシア彫刻「スパルタの少女」の絵が、下

表2 『審美と体育』にみる人間美の条件

a. 体格と 発育状況	b. 全身の 調和	c. 容貌・体格の 造作	d. 服装・ 身だしなみ	e. 動作	f. 全体の 雰囲気
<ul style="list-style-type: none"> <li>・雄大さが感じられるような調和的に発達した変形であること</li> <li>・健康的によく発達した肉体を所有していること</li> <li>・すなわち大柄であること</li> <li>・健康な肉体と健全な体格を持っていること</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・部分（顔）と全体（変形）の美が調和していること</li> <li>・バランスのとれた調和の美の所有者であること</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・色艶がよいこと</li> <li>・頬紅は濃く、唇は赤いこと</li> <li>・顔面は余り大ならざること</li> <li>・顎は余り細からざること</li> <li>・肩は余り角張らざること</li> <li>・胸囲は相当に長さこと</li> <li>・腰部の発育可良なること</li> <li>・骨盤及び臀部の発育可良なること</li> <li>・脚長の成る可く長さこと</li> <li>・背が高くスラリとした脚をもつこと</li> <li>・顔の表情が豊かであること</li> <li>・瞳はいきいきとして大きいこと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・頭髮は単純で軽快でスマートにととのえられていること</li> <li>・服装はピッタリと身につけて軽そうであること</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歩行が正常であること</li> <li>・姿勢が端正であること</li> <li>・眼も手も足も活々と動いていること</li> <li>・動作は軽快で複雑であること</li> <li>・軽やかに健康的な足どりで歩くこと</li> <li>・瞳を上げて大股に歩くこと</li> <li>・科学的にスポーツで鍛えられていること</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明朗であること</li> <li>・溶潤としていること</li> <li>・理知的であること</li> <li>・気品があり精神美の羅如たるものが窺はれること</li> </ul>

記のような解説とともに毎号掲載されている。その事実に着目し、この絵の意味を考えてみたい。

「図は西紀前5世紀中頃の制作の大理石模造と伝えられ、ローマのヴァティカン宮殿に蔵してある所の競歩に走る軽快なる少女の姿態である。短く垂れたる髪、右の肩から胸まで露はし、膝に達せぬチウニツクを纏ひ、弾力と天真に満ちた美しさ、意気颯爽として均斉調和に発育した肉体を長閑にハシつて居る。そこに少しも濃艶な官能の臭気がなく、性にうゑたる者に対する誘惑物とは大いに趣を異にし、純真にして如何にも清浄な肉体美の描写である。」<sup>(45)</sup> 巻頭)

一方、「審美と体育」の論説中に、大河内は、この表紙の絵を見ると絵に示された精神が終始一貫した理想に向って邁進するような印象を感じるという文章を寄せている(大河内<sup>35)</sup> p.11)。絵に示された精神とは、大河内の考えでは「美と善」であり、肉体と精神の完成を意味しているという(大河内<sup>35)</sup> p.11)。そしてこの美は、青年が発揮する純真で潑刺とした活動の調和美を指す(大河内<sup>35)</sup> p.11)。すなわち、この絵には「純真」「颯爽」「潑刺」「清浄」「均斉」「調和」という美徳が象徴されているといえる。

「審美と体育」はこの絵を毎号の表紙に掲げることで、理想の精神とそれを体現した肉体を視覚的に表現していたといえる。すなわち、「スパルタの少女」は、「審美と体育」がめざす「美」の象徴としての意味をもっていたといえよう。

## (2) 美と体育の関わり

「審美と体育」においては、美の欲求を人間の本能と考える立場から、その本能を満足させるものとして芸術と体育が考えられている。そして、彼らは芸術の視点と方法を体育に導入することによって人間の心身の完成をめざしたのである(荒木<sup>6)</sup> p.66、遠藤<sup>12)</sup> pp.50-51、北上<sup>22)</sup> pp.51-53、大河内<sup>35)</sup> p.12)。彼らは人生を四季に例え、体育を「人生の変遷に介在して、常に新生命を培養し、時に応じて其活力を発揚せしむるもの」<sup>(53)</sup> 巻頭)ととらえた。そして体育の教育目的を「人間としての力の養成」(上林<sup>15)</sup> p.18)と考えた。またこの「人間としての力」とは、体力だけでなく「人間としての熟練、人間としての品性、人間としての知識、人間としての礼儀、人間としての態度、人間としての情義、是等のすべての総合」(上林<sup>15)</sup> p.18)を意味していた。

その根底には、人間の精神・感情と肉体とは互いに影響しあっているという考え方があつた。(木内<sup>21)</sup> p.40)したがって、精神の美は身体に表れ、身体の美的な修練によって精神にも美的観念を育成することができるとの主張がみられる(大河内<sup>37)</sup> pp.10-15、木内<sup>21)</sup> p.44)。

## (3) 体育における美とダンスの関わり

上述のような体育の構想において、大河内は、体操・教練・遊戯の各領域は互いに特有の性質をもち、全ての領域における学習体験が偏りなくおこなわれることによって調和のとれた人間が完成すると主張した(大河内<sup>36)</sup> pp.27-29)。では、このような体育観のもとでダンスはどんな役割を担っていたのであろうか。

「審美と体育」で紹介された、東京のある小学校の「体操科教授細目」は、大河内と共通の体育観に拠って立案されたものである。同校では、ダンス教育によって「調律的な動作によりて運動と感情との相調和により快活温雄なる精神と端正優美なる容姿とを養ひ以て心身の円満なる発達をはかる」(S.Y生<sup>41)</sup> p.65)とし、「本教材の芸術的訓練を与へることの効多なること(中略)又今日では教育的にも効大なることを認められる」(S.Y生<sup>41)</sup> p.70)ことから、「ジムナスティックダンス<sup>註5)</sup>」と「エセティックダンス」を指導する、とある(S.Y生<sup>41)</sup> p.70)。

このように、体育においてダンスは、運動と感情を調和させることによって心身を美的かつ円満に育成するという役割を期待されていた。すなわち、心身は一体の存在ととらえられ、リズムカルな身体運動は感情と調和することによって身体と精神の双方にはたらきかけるものと考えられていることがわかる。そしてそのような教育的効果の認められる教材として「体育ダンス」が実践されていたのである。

## (4) 「審美と体育」にみる「美」の思想の特徴

以上のことから、「審美と体育」にみる「美」の思想の特徴はつぎのようにまとめられる。

①内面の美は外面の美となつてあらわれる。これは、人間についても芸術作品についても同じである。

②技巧的に創り出された外面の美よりも内面から自然ににじみ出てくる美を尊重する。

③心身は一体の存在であり、互いにはたらきかけ合い調和することによって心身の美が育成される。

④真・善・美はその根源において同一である。

また、これらの特徴に共通にみられる概念は、「つながり合い」の概念である。「審美と体育」にみる「美」の思想においては、「内面と外面」「心と身体」「真・善・美」は互いにつながり合つて存在すると考えられていたことがわかる。

「審美と体育」においては、これらの「美」の思想は、論説など論理的な思考にうったえる形式や随筆・小説・戯曲・口絵など直観的な感性にうったえる形式によって様々に表現されていた。

また、同様に、これらの思想は、科学・哲学・芸術・生活など様々な文化の領域を対象として総合的に解釈され展開されていた。

このような誌面づくりにも〈つながり合い〉の概念が反映されているといえる。すなわち、『審美と体育』では、形式において〈論理的思考と直観〉が〈つながり合い〉、対象において〈心と身体〉〈文化の領域〉が〈つながり合〉って、総合的に〈美〉の思想を解釈・展開・表現していたといえる。

さらに、これら科学・哲学・芸術・生活といった文化は、真・善・美といった人間の徳がつかさどる領域であるとも考えられる。そうであるならば、『審美と体育』では〈人間の徳と文化〉も〈つながり合った存在〉ととらえられていたといえる。

そしてそのような思想的背景をもつ体育を実践するにあたり、〈心と身体〉〈感情と運動〉を調和的に発達させるものとしての役割が、ダンス教育に託されていたのである。

#### (5) 〈美〉の思想を展開した中心的人物たち

以上みてきたように、『審美と体育』には様々な人々によって〈美〉の思想が展開されており、またそれらの思想は体育の中でダンス教育を通して具現化され、指導・紹介されていたことが明らかになった。そこで次に、そのようなはたらきの中心的役割を果たした人物たちは誰なのかという問題について探っていくこととする。表3に示したのは『審美と体育』にみる〈美〉の思想およびダンスに関する記事すなわち a. 美と人間、b. 美と体育、c. 美とダンス、d. ダンスの指導・紹介の4領域に分類された記事の執筆者一覧である。

表3は、表4に示す全212件の記事から上記のa, b, c, d 領域に分類された69件の記事を抽出し、さらにその中から口絵や執筆者不明の記事23件を除いた46件について執筆者名とその肩書き等を可能な限り調べまとめたものである。その結果、のべ32名の人物が〈美〉の思想およびダンスに関する記事を執筆していることがわかった。

その中で、複数の記事を執筆しているのは荒木直範(全9件)・大河内泰(全6件)・小菅一男(全3件)・小島櫻峰(全3件)・中里史子(全2件)の5名であり、他の執筆者は全て1件ずつ執筆している。(ただし小島の3件は連載小説の3話分を示し、中里の2件は戯曲2作を示す。)さらにこれら5名のうち複数の領域にわたって記事を執筆しているのは荒木・大河内・小菅である。彼らの肩書き等をみると荒木については前出のとおりであり、大河内は高等女学校教諭および研究会本部幹事・小菅は高等女学校教諭である。また、記事の内容をみると、荒木の執筆したダンスの指導・紹介記事が7件あり、その他は全て〈美〉に関する主題を含む論説であった。したがって、彼ら3名は『審美と体育』における体育への〈美〉の導入という課題に関する理論研究や指導実践の中心的な人物であったと考えられる。

また、資料收拾の困難さから数量的な裏付けには限界があるが、それを補うものとして、研究会での役職も中心的人物を知る手がかりとなろう。表3から8名の人物が研究会の本部または支部役員であったことがわかる。そのうち、本部役員であったのは、前出の荒木・大河内のほか榎友三郎・赤間雅彦・高橋平治・土取信がいる。これらの4名も、本部役員として理論と実践の各局面で指導的立場にあったことがうかがわれる。特に赤間は、研究会本部付きの研究部委員兼指導主任という役職に就いていたことが判明しており、中心的人物の一人と考えられる。

したがって、資料收拾の限界はあるが、現段階では『審美と体育』において体育への〈美〉の導入を理論面で展開しダンス教育を通してそれを実践するにあたり中心的なはたらきをした人物として、荒木直範・大河内泰・小菅一男・赤間雅彦の4名をあげることができる。

この4名のうち、現時点で略歴等が先行研究により判明しているのは荒木と赤間の2名のみである。荒木については既に述べた。赤間については大正13年に日本体育会体操学校高等本科を卒業後日本体育会体操学校教授となり少なくとも昭和11年まではその地位にあったということが判明している(中野<sup>31)</sup> p.137)。出生年が明らかにされていないので、卒業年から推定すると、荒木より若いかはほぼ同世代の人物であろうと思われる。

主幹・荒木の当時の年齢が32~33歳と若いことと研究同人としての関係を考えると、彼らは『審美と体育』を通じて互いに思想上の影響を与え合い、その共通の基盤に立って研究・指導を行なうといった、いわばヨコの関係でつながり合っていたのではないかと思われる。

### 3. 荒木直範の〈美〉の思想の見直しと「体育ダンス」論の思想的背景における〈美〉の位置づけ

#### (1) 美と人間の関わりについて

荒木直範は著書『体育ダンス精義』の中で、美によって人生を飾ろうとする心は人間の本能であると主張している(荒木<sup>2)</sup> p.20)。そして、民族の文化の程度はその人種の美的観念の優劣によって知ることができると彼は考え、美的観念の存在するところでは生活状態も美化し、美的趣味の欠乏しているところでは人心が荒み不善がおこなわれると説いた(荒木<sup>2)</sup> p.20)。この主張の根底には、「真・善・美は本質的に同質である」とする古代ギリシアの哲学者プロチヌスの考え方の影響がみられる(荒木<sup>2)</sup> p.20)。この考え方は、前に明らかにした『審美と体育』における〈美〉の思想の特徴と一致している。

人生における真・善・美の実現をめざす荒木の

表3 執筆者一覧

\*は、大日本体育遊技研究会会員及び役員を示す。：は、研究会での役職を示す。○は、複数の分類領域にわたって執筆している人物を示す。

分類領域	執筆者名	肩書等	記事No.	件数
a. 美と人間	*大河内泰○	長野県諏訪高等女学校：本部幹事	020, 055, 091, 125,	4件
	小島櫻峰	作家	038, 074, 108,	3件
	中里史子	作家	109, 197,	2件
	*荒木直範○	東京女子体操音楽学校：本部主幹	052,	1件
	*櫛引友三郎	文学士, 群立第三高等女学校教授：本部理事	014,	1件
	S子		098,	1件
	小菅一男○	神奈川県横浜市岡崎高等女学校	126,	1件
	櫻井匡	文学士, 関西大学教授	013,	1件
	柴田舜太郎	パフェラー・オファー	012,	1件
	関田佳鳥		060,	1件
前原寛太郎	日本体操学校	028,	1件	
b. 美と体育	*大河内泰○	前出a参照	127, 157,	2件
	小菅一男○	前出a参照	027, 061	2件
	*荒木直範○	前出a参照	025,	1件
	S. Y. 生		129,	1件
	上林英太	甲南高等学校教授	015,	1件
	北上廣之助		097,	1件
橋本勇		145,	1件	
c. 美とダンス	小林宗作	リミック研究所	026,	1件
	木内ぎん	東京女子体操音楽学校学生	057,	1件
	高橋つね	東京女子体操音楽学校学生	058,	1件
	遠藤ちま子	東京女子体操音楽学校学生	059,	1件
d. ダンスの指導・紹介	*荒木直範○	前出a参照	032, 067, 088, 130,	7件
	*赤間雅彦	日本体育会体操学校教授：本部幹事・研究部委員・新導主任	161, 162, 189,	1件
	*川崎禮以子	大阪集英幼稚園：大阪支部役員	132,	1件
	*高橋平治	福岡県女子師範学校：福岡支部主任・本部幹事	034,	1件
	*土取信	東京府立第一高等女学校：本部幹事	019,	1件
	*八木カネ	大阪木田幼稚園園長：大阪支部役員	187,	1件
	佐藤袖子	家庭体育実践者	033,	1件
	香沼く利根>止水		064,	1件
	土川五郎	律動遊戯研究所主宰	068,	1件
	Y. M. 生		131,	1件
			133,	1件

表4 『審美と体育』記事分類一覧

分類領域	a. 美と人間 記事件数27件	b. 美と体育 記事件数9件	c. 美とダンス 記事件数11件	d. ダンスの指導・紹介 記事件数22件	e. 体操・スポーツ・レクリエーションの指導・紹介 記事件数41件
記事No.	001, 012, 197, 013, 014, 020, 028, 038, 041, 051, 052, 055, 060, 074, 077, 078, 081, 088, 108, 109, 112, 125, 126, 148, 149, 175, 176,	015, 025, 027, 061, 097, 127, 129, 145, 157,	002, 005, 026, 042, 043, 044, 045, 046, 057, 058, 059,	019, 032, 033, 034, 047, 048, 064, 067, 068, 088, 102, 113, 130, 131, 132, 133, 161, 162, 178, 179, 187, 189,	003, 004, 117, 118, 006, 007, 119, 140, 008, 008, 141, 142, 021, 022, 158, 159, 035, 036, 163, 170, 056, 069, 171, 172, 070, 071, 186, 188, 072, 082, 181, 083, 084, 092, 103, 104, 105, 106, 114, 115, 116,
分類領域	f. 論説・随筆 記事件数8件	g. 研究会活動報告 記事件数18件	h. 人生の探求 記事件数11件	i. 遊・雑・語 記事件数11件	j. 生活 記事件数15件
記事No.	016, 018, 054, 063, 090, 099, 124, 156,	023, 024, 079, 080, 081, 093, 094, 095, 096, 139, 150, 151, 152, 164, 165, 166, 167, 168,	017, 062, 135, 155, 160, 169, 190, 203, 204, 205, 206,	039, 053, 087, 128, 144, 193, 184, 195, 196, 198, 209,	030, 031, 065, 066, 089, 100, 101, 136, 137, 138, 173, 199, 200, 201, 202,
					k. 荒木への追悼文 記事件数6件
					134, 181, 182, 183, 184, 185, 085, 086, 107, 110, 111, 120, 121, 122, 123, 143, 146, 147, 153, 154, 174, 177, 180, 192, 207, 208, 210, 211, 212,
					l. その他 記事件数33件
					010, 011, 029, 037, 040, 049, 050, 073, 075, 076, 010, 011, 029, 037, 040, 049, 050, 073, 075, 076,



思想は、「審美と体育」誌中に反映されている。具体例をあげれば、前出の小島櫻峰の小説「愛と人生」に対する読者の投稿には、次のような一文も含まれていた。「全体を通じて、それが荒木主幹の思想に非常に似て居る様です、イブセンの哲学、キリスト、トルストイ、ダヌンチオの例が引かれてある所、それ等はよく主幹の口から聴かされる所です。」(K生<sup>28</sup> p.92) すなわち、この小説は、荒木の語る思想と人生を探究する姿勢とを小説という形式によって発表したものと解釈できる。換言すれば、荒木の思想を登場人物の独白や言動の中に具現化しようとした試みが、この小説であったといえよう。

荒木の思想においては、理想の人間美とはどのようなものだったのであろうか。

荒木は、特に女性のあるべき姿について言及している。彼は、旧来、日本女性は活動のしにくい和服に身体を拘束され、体づくりのために運動をする機会も与えられていなかったと指摘した。しかし、女性の社会進出がすすむ第一次世界大戦後の世相をふまえ、彼は、活動意欲と能力をもち健康で活発な女性が新時代の理想像となると主張した(川上<sup>19</sup> pp.11-12)。具体的には、前出の中里史子の戯曲「秋の夜」に描かれている女性像は、健康・活発という点で荒木の示した理想の女性像と一致する。彼の理想が、具体的なイメージをもって登場人物の描写の中に具現化されているといえよう。

### (2) 美と体育の関わりについて

荒木が大切にしていたのは、生きた人間のからだを通して表出される、その人の内面と外面とが一体になった〈美〉であったといえる。

荒木直範にとって、体育とは人生の修業という課題を達成するための修練の場であり、人間としての必須教養であった。真・善・美は互いにつながり合って存在し、心と身体もまた互いにつながり合って存在すると荒木は考えていた。そういった意味で、彼にとって、体育は肉体を通しての知育であり徳育であるともいえる。そのため、彼にとって、体育は科学・哲学・芸術を根拠としそれらが互いにつながり合って存在すべきものであった。荒木は体育へ〈美〉の観念を導入し、それによって全人教育としての体育を実現させようとしたのである(荒木<sup>1</sup> p.30, 荒木<sup>6</sup> p.66)。

### (3) 美とダンスの関わりについて

荒木の体育構想の中でも彼の力量が最も発揮されたのは「体育ダンス」であった。彼の思想において、「体育ダンス」は、身体の美的修練と心の美的教養の育成という役割を担っていた(荒木<sup>9</sup> p.2, 川上<sup>19</sup> p.35)。荒木が「体育ダンス」を通して追求しようとしていたのは、真・善と一体となって、生きる人間としての存在全体を貫く美で

あった。それは、

- ①健康的に発達した肉体の美
- ②知性に裏付けられた精神の美
- ③美的観念を感じとれる心の美
- ④内面の美を外界に表出する動作の美

であった。これは、「審美と体育」における〈美〉の理想と一致する。

また、これらの〈美〉は〈心身ともに健康に発達して活発で、身なりも行動もスマートで気品がある〉という理想の人間像に集約されている。

### (4) 荒木直範の「体育ダンス」論の思想的背景における〈美〉の位置づけ

荒木はこのような理想の人間像を実現させる教育方法の一つとして「体育ダンス」に注目した。

ダンスは音楽の美・肉体の美・運動の美が生きた人間のからだの中で一体となって外界に表出されるものである。荒木は、生物学・心理学・哲学の3つの観点からダンスの本質を考察した結果、体育運動を目的としたダンスを行なうことによって音楽や運動に内包される生命力や美を感じとる力や、生命力や美を自らのからだで表現する力、そしてそれを実現させる健康で美しいからだが育成されるのではないかと考えるに至った(荒木<sup>9</sup> pp.6-15)。

「体育ダンス」を教材化するにあたり、彼は、美的かつ生理・解剖学的に自然な運動によってダンス教材が構成されなければならないと考え、基本姿勢や基本ステップなどを提示し、指導のガイドラインを示した。また彼は、科学的な根拠に基づいた合理的な指導が必要であるとも考え、発達段階に応じた教育カリキュラムを示した。

すなわち、彼の「体育ダンス」論の思想的背景には、科学・哲学・芸術と体育が互いにつながり合って存在しているといえる。これらの領域をつなぎ合わせているのは、〈人間〉〈からだ〉〈美〉というキーワードである。そして彼が「体育ダンス」論を通して実現させようとしたのは、〈生きる人間のからだから表出される美〉であったと考察できる。

したがって、〈美〉は荒木の「体育ダンス」論の思想的背景を構築する3つのキーワードの中で最も重要な概念であったと位置づけられる。

### (5) 荒木の〈美〉の思想と「審美と体育」との関わり

第一に、「審美と体育」は、荒木が主宰した大日本体育遊技研究会の機関誌であり、代表編集者には荒木直範自身が就任している。(表1「荒木直範と『審美と体育』の年譜」参照) 第二に、荒木が追求した〈美〉は〈心と身体〉〈感情と動作〉が一体につながり合って実現するものであり、荒木の〈美〉の思想と「審美と体育」にみられる〈美〉の思想とは一致しているといえる。第三に、

「科学・哲学・芸術を根拠として調和統一せる体育主義の建立」という『審美と体育』の目標は、荒木の「体育ダンス」論の思想的背景にある考え方も共通している。これらの事実から、荒木の思想は『審美と体育』の誌面づくりに多分に反映されているとみるのが妥当であろう。

『審美と体育』では、形式・対象の両面から、〈美〉の思想が総合的に解釈・展開・表現されているが、このことによって、荒木の示した〈美〉の思想は、個人の活動の限界を超えて、より多彩に展開されることが可能となったといえる。

#### IV. 結論

本研究は、「体育への〈美〉の導入」という視点から、『審美と体育』にみる〈美〉の思想の実際を明らかにし、荒木直範の「体育ダンス」論の思想的背景について考察してきた。その結果、以下の事柄が明らかにされた。

第一に、『審美と体育』にみる〈美〉の思想の特徴はつぎのようにまとめられる。

- ①内面の美は外面の美となってあらわれる。これは、人間についても芸術作品についても同じである。
- ②技巧的に創り出された外面の美よりも内面から自然にじみ出てくる美を尊重する。
- ③心身は一体の存在であり、互いにはたらきかけ合い調和することによって心身の美が育成される。
- ④真・善・美はその根源において同一である。

これらの特徴の根源にあるのは〈つながり合い〉の概念である。さらに、『審美と体育』においては、〈つながり合い〉の概念が誌面づくりの際にも重要な役割を果たしていた。形式においては〈論理的思想と直観〉が、対象においては〈心と身体〉〈文化の領域〉が互いにつながり合って、総合的に〈美〉の思想が解釈・展開・表現されていた。このような誌面づくりにおいて、〈論理的思想と直観〉〈心と身体〉といった対比的な概念や異なった領域同士が共通の思想の下につながり合うことによって、互いに補完し合いながら〈美〉の思想を世に伝えるはたらきをしていたとみることができる。

第二に、荒木の「体育ダンス」論の思想的背景としては、以下の事柄がわかった。すなわち、彼は、一人の人間を、知的・道徳的・美的・精神的・肉体的につながり合ったまるごとの存在ととらえ、それら相互の関わり合いの中で生きる存在であると考へた。荒木は、真・善・美が一体となって生きた人間のからだから表出される〈美〉を理想と考へていた。それは〈心と身体〉〈感情と動作〉が〈つながり合って実現するものであった。『体育ダンス』は、この思想を、生きた人間の

らだを通して具現化させ教育的に実践したものである。彼の「体育ダンス」論の思想的背景は、科学・哲学・芸術と体育とが互いにつながり合うことによって構築されていた。そのつながり合いを構築するキーワードは〈人間〉〈からだ〉〈美〉であり、中でも〈美〉は「体育ダンス」論の中核をなす最も重要な概念であったといえる。

以上みてきたことから、荒木の思想と前述の『審美と体育』にみる〈美〉の思想とはいずれも〈つながり合い〉という概念を特徴にもち、共通しているということがわかった。したがって、『審美と体育』には、様々な形態の記事によって荒木の示した〈美〉の思想がより多彩に展開されていたとみることができる。

『審美と体育』において体育への〈美〉の導入を理論面で展開しダンス教育を通してそれを実践した中心的人物として、荒木直範・大河内泰・小菅一男・赤間雅彦の4名があげられた。このことは荒木と同時代の体育ダンス研究者たちとの思想上のつながりを示唆する。彼らは『審美と体育』を通して互いに思想上の影響を与え合い、その共通の基盤に立って理論・実践両面での活動を行なったものと予測できる。彼らの影響関係については、彼ら一人一人についての略歴や業績等を明らかにしたうえで解明されなければならず、今後の研究課題といえる。

複数の領域が〈つながり合った広い視野から人間の営みを理解し、生きたからだの教育を通して頭と心と体のバランスをとりつつ人生のあらゆる局面において〈心身いかに美しく生きるべきか〉を追求しようとする荒木直範と『審美と体育』の姿勢は、ともすれば知育偏重になりがちな現代の学校教育や、技能偏重になりがちな現代の学校体育が回帰すべき人間の在り方を示唆しているように思われる。

先人の遺した思想を明らかにし、その主張に内在する魂を掘り起こして現代に生かすこと—これは、現代に生きる者の課題であろうと考へる。今後は、そのような視点に立った研究と教育実践の可能性についても探っていきたい。

#### 謝辞

本稿執筆にあたり、日本体育大学図書館のご協力とお茶の水女子大学片岡康子教授のご指導をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

#### 註一覧

- 1 「体育ダンス」とは、Gymnastic Dance の訳語であり、ダンス教材の一種である。Gymnastic Dance は、元来は体操の動きをリズムカルなダンスにアレンジした「キャリセニックダンス」や「アスレチックダンス」に相当するものを指

していたが、その後、体育を目的とした多様なジャンルのダンスを総称する語として用いられるようになった。

訳語については、荒木直範が大正8年の講習会で東京 Y.M.C.A. 体育部主事の W.S. ライアンと共に Gymnastic Dance を我が国に初めて紹介した際、「広く体育を目的とするダンス」という意味を表すため「体育ダンス」と訳したものと、荒木自身により説明されている。

- 2) ダンス、スポーツ、ゲーム、レクリエーションを含む。
- 3) 「審美と体育」が発行されていた大正末期から昭和初期にかけて発行されていた体育・遊戯関係の雑誌には、以下のものがある。  
大日本体育学会「体育と競技」、大日本体育協会「アスレチックス」、運動界社「運動界」、健康堂「体育研究」、日本体操遊戯研究会「女子体育」、陸軍戸山学校「体育と武道」、大日本体育同志会「日本体育」、東京学校遊戯研究会「遊戯と唱歌」、経済新聞社内女子スポーツ部「女子スポーツ」、日本女子体育協会「健康の女性」など  
これらの多くは、散逸のため全貌が定かではない。そのような状況の中で「体育と競技」は復刻版により全貌が確認できる貴重な研究資料である。
- 4) 第2巻第1号が昭和2年(1927)年1月に発行された後、昭和2年(1927)年4月に第3巻第4号が発行されるまでの間にどんな事情があったのかは不明であるが、同年に出版されているにもかかわらず、「審美と体育」はこれ以降第3巻・第4巻として順次出版されている。
- 5) ここでいう「ジムナスティックダンス」とは狭義のジムナスティックダンスであり、荒木の提示した「体育ダンス」における「キャリセニックダンス」または「アスレチックダンス」に相当すると考えられる。

#### 引用・参考文献一覧

- 1) 荒木直範「体育ダンスと社交ダンス」日本評論社。1923. pp. 28-29.
- 2) 荒木直範「体育ダンス精義」都村有為堂。1923. pp. 20-21.
- 3) 荒木直範「体育ダンス教材集①」都村有為堂。1926. pp. 6-9.
- 4) 荒木直範「体育ダンス教材集②」有村有為堂。1927. pp. 16-17.
- 5) 荒木直範「体育ダンス スマイリング・チェリー」『審美と体育』第2巻第1号。1927. 巻頭口絵
- 6) 荒木直範「私個人として」『審美と体育』第2巻第1号。1927. pp. 65-67.
- 7) 荒木直範「女子体育の現在及将来」『審美と体育』第3巻第4号。1927. pp. 4-11.
- 8) 荒木直範「体育ダンスの教材配当標準に就て」『審美と体育』第3巻第6号。1927. pp. 4-11.
- 9) 荒木直範「体育ダンス概論」『アルス運動大講座』第3巻。1927. pp. 2-3.
- 10) 梅花白屋主人「思ひ出づるまゝの記」『審美と体育』第4巻第3号。1928. pp. 86-90.
- 11) 大雷翔天「神宮競技場女子体育大会に活躍した我会の俤観」『審美と体育』第3巻第6号。1927. pp. 34-40.
- 12) 遠藤ちま子「体操とダンスの関係を論ず」『審美と体育』第3巻第4号。1927. pp. 49-52.
- 13) 橋本勇「魂のぬけがら」『審美と体育』第4巻第3号。1928. pp. 114-120.
- 14) 廣兼志保「荒木直範(1894-1927)の体育ダンスにおける身体観について—近代化の方策としての『からだづくり』という視点からの考察—」第35回 山陰体育学会発表資料。1996.
- 15) 上林英太「体育上より見たる体操の価値」『審美と体育』第2巻第1号。1927. pp. 16-19.
- 16) 片岡康子「荒木直範著『体育ダンス精義』『女子体育基本文献集別巻・女子体育の研究』大空社。1995. pp. 59-63.
- 17) 河辺英守「寺島審美体育会最初の集まり」『審美と体育』第3巻第6号。1927. pp. 45-46.
- 18) 川上志保・片岡康子「荒木直範(1894-1927)の体育ダンス教材分析『東京体育学研究1990年度報告』1990. p. 3.
- 19) 川上志保「荒木直範(1894-1927)のダンス教育論とその実際—体育ダンスを中心に—」お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士論文。1990.
- 20) 木下秀明・能勢修一・木村吉次「体育・スポーツ書改題」不昧堂出版。1981. p. 523, 525, 540, 546, 553, 565.
- 21) 木内ぎん「体操とダンスの関係を論ず」『審美と体育』第3巻第4号。1927. pp. 40-44.
- 22) 北上廣之助「体育の背景に思想と芸術があつて欲しい」『審美と体育』第3巻第6号。1927. pp. 51-43.
- 23) 小林宗作「舞踊茶話」『審美と体育』第2巻第1号。1927. pp. 68-71.
- 24) 小島櫻峯「小説 愛と人生」『審美と体育』第2巻第1号。1927. pp. 110-117, 第3巻第4号。1927. pp. 100-108, 第3巻第6号。1927. pp. 94-106.
- 25) かつを・こすげ「運動と詩と愛」『審美と体育』第2巻第1号。1927. pp. 71-73.
- 26) かつを・こすげ「体育観」『審美と体育』第

- 3巻第4号.1927.p.59.
- 27) 小菅一男「姿勢と感情との交渉に就て」『審美と体育』第4巻第3号.1928.pp.18-22.
  - 28) K生「誌友の声」『審美と体育』第3巻第6号.1927.p.92.
  - 29) 榎引友三郎「審美及芸術に関する問題に就て(一)」『審美と体育』第2巻第1号.1927.pp.13-16.
  - 30) 前原富太郎「姿勢と美人」『審美と体育』第2巻第1号.1927.pp.73-76.
  - 31) 中野祐子「日本体育会・赤間雅彦の舞踊教育一大正・昭和前期において一」『島根大学教育学部紀要(教育科学)第20巻』.1986.pp.127-139.
  - 32) 中里史子「秋の空」『審美と体育』第4巻第12号.1928.pp.44-49.
  - 33) 大河内泰「遊戯の本質論」『審美と体育』第2巻第1号.1927.pp.39-44.
  - 34) 大河内泰「遊戯の本質論」『審美と体育』第3巻第6号.1927.pp.22-29.
  - 35) 大河内泰「女子体育論」『審美と体育』第4巻第3号.1928.pp.10-18.
  - 36) 大河内泰「学校体育の根本問題」『審美と体育』第4巻第3号.1928.pp.27-29.
  - 37) 大河内泰「学校体育の目標」『審美と体育』第4巻第7号.1928.pp.10-15.
  - 38) 櫻井匡「健康の美・身体の美」『審美と体育』第2巻第1号.1927.pp.8-13.
  - 39) 柴田舜太郎「日本民族と体質改良の原理」『審美と体育』第2巻第1号.1927.pp.4-8.
  - 40) S子「断片」『審美と体育』第3巻第6号.1927.pp.53-56.
  - 41) S.Y生「体操科教授細目」『審美と体育』第4巻第3号.1928.pp.43-74.
  - 42) 高橋つね「体操ダンスの関係を論ず」『審美と体育』第3巻第4号.1927.pp.44-49.
  - 43) 高田圭峯「大阪と神戸に長期講習始まる我荒木主幹を迎へて」『審美と体育』第3巻第6号.1927.pp.41-44.
  - 44) Tolstoj, Lev Nikolaevich.「真の芸術」『審美と体育』第3巻第6号.1927.pp.2-3.
  - 45) 「ギリシア彫刻・スパルタの少女」『審美と体育』第2巻第1号.1927, 第3巻第4号.1927, 第3巻第6号.1927, 第4巻第3号.1928, 第4巻第7号.1928, 第4巻第12号.1928の各表紙
  - 46) 「空中の美態」『審美と体育』第2巻第1号.1927.巻頭口絵
  - 47) 「姿態美の芸術」『審美と体育』第3巻第4号.1927.巻頭口絵
  - 48) 「ラ・ジムナスティック・ハーモニック」『審美と体育』第3巻第4号.1927.巻頭口絵
  - 49) 「体育ダンス『エントランス・オブ・スプリング』」『審美と体育』第3巻第4号.1927.巻頭口絵
  - 50) 「身体美の芸術」『審美と体育』第3巻第6号.1927.巻頭口絵
  - 51) 「整へるバルンス」『審美と体育』第4巻第7号.1928.巻頭口絵
  - 52) 「編集余録」『審美と体育』第3巻第6号.1927.p.116.
  - 53) 「巻頭の辞」『審美と体育』第3巻第4号.1927.巻頭
  - 54) 「巻頭の辞」『審美と体育』第4巻第3号.1928.巻頭
  - 55) 「体育ダンス夏期講習公告」『審美と体育』第3巻第6号.1927.巻頭
  - 56) 「公告」『審美と体育』第2巻第1号.1927.巻頭
  - 57) 「大日本体育遊技研究会々則」『審美と体育』第2巻第1号.1927, 第3巻第4号.1927, 第3巻第6号.1927, 第4巻第3号.1928, 第4巻第7号.1928.の各巻頭
  - 58) 「編集室より」『審美と体育』第4巻第12号.p.75.
  - 59) 「内容一般及投稿規定」『審美と体育』第4巻第12号.p.75.